

おめでとう！北沢猛助教授、新領域創成科学研究科教授に昇進

「空間計画学と名づけた研究・講義を」と意欲的あいさつ



東大西村幸夫・北沢猛研究室として、先駆的な都市工学科、大学院工学研究科都市工学専攻の声価を上げた「都市デザイン研究室」の北沢猛助教授（52）が、7月1日付で大学院新領域創成科学研究科教授に就任した。2006年度から柏キャンパスで「空間計画学」の研究と講義を行う。6月30日の研究室会議で、「新組織は社会学、農学、工学など幅広い先生で構成されているので、この際幅を広げてチャレンジしたい。空間計画学は、空間を中心にうまく融合していくものをめざす」と意欲的なあいさつをした。

北沢教授が新領域創成科学研究科の環境学専攻・社会文化環境コースに所属して、「空間計画学」を創設することには、斬新で緊要な意義があり、挙げて期待されることである。アーバンデザインの都市づくりで名を馳せた横浜市の都市デザイン室長を経て、8年前に母校都市工の助教授になった実績は大きい。

都市デザイナー、横浜市参与でもあり、「都市デザイン概論」「都市設計特論2」をはじめ、横浜のまちづくりを間断なく講義に反映させるとともに、フロアに降りて質疑応答する双方向授業に努めた。西村教授との呼吸もびたりで、研究室の黄金時代を築いた。今後は「実質的に半分こちらで」ということになる。

「ワクワク思う存分にやる」

北沢節でインタビュー



これに先立ち本誌M1坂内良明スタッフが、北沢猛新教授の抱負を聞いた。

「実際に行ってみないことには、よくわからない部分も多い。来年度は院生3人ていどでの研究室スタートになるから、当分は都市デザイン研と協働してという感じだろうね」

新領域創成科学研究科は、各教官が独立に研究室を持つ。今年8月の入試で合格した学生が、柏・北沢研究室の第1期生となる。

「文系の方が同じセクションにいるというのは、これまでとは違って刺激的だね。ワクワクする。コースの別にもとらわれずに、何か興味が重なったら一緒にやる。そんな心づもりでゆくよ」

学際への期待を語りながら、最後には得意の北沢節も飛び出した。

「しがらみ、縄張りのないところだから、好きなことを思う存分やる。まあ、これまで都市工でもそんな感じだったけどさ」

柏に移っても、学部の授業（都市デザイン概論）は本郷（都市工学科）で来年度も行われる。また、学部生・院生への研究指導も当分は従前通りとのことなので、北沢節が聞けなくなるという心配は、とりあえず無用だ。

プロフィール

北沢猛（きたざわたける）東京大学大学院教授（新領域創成科学研究科環境学）、アーバンデザイナー、横浜市参与・京都府参与・横須賀市専門委員。博士（工学）。

1953年長野県生まれ。会津喜多方育ち。東京大学工学部都市工学科卒業。大谷幸夫先生、渡辺定夫先生の指導を受ける。

1977年に横浜市に入庁、飛鳥田一雄市政において、田村明氏や岩崎駿介氏が率いる企画調整局都市デザイングループにおいて、実践的な都市づくりに参画、同市都市デザイン室長を経て、1997年東京大学へ移籍。

現在は、横浜市などの自治体政策に参与するほか、実践的な空間計画や手法研究を行っている。

著書に『ある都市の歴史 横浜 330年』（福音館書店）、編著に『都市のデザインマネジメント』（学芸出版）、『明日の都市づくり』（慶応義塾大学出版会）がある。

第4回研究室会議

第4回研究室会議は6月30日(木)に開かれ、修士課程の金宗範「沿道型街区のデザインと評価に関する研究 幕張ベイタウンを中心に」、リー・クウィン・チー「THE TRADITIONAL VILLAGE IN THE FRINGE OF HANOI」、江口久美「都市の痕跡の読み取りとそれを生かした都市再生の手法に関する研究」、竹山奈未「風を生む設計ほか」の研究発表に続いて、北沢新教授のあいさつがあった。

田中暁子ベルギー通信

セルクラース像とシャルル・ビュルス

田中院生は都市工博士課程在学、ブリュッセル自由大学にベルギーフランス語圏共同体奨学金留学生として留学中で、昨夏研究室会議に出席。西村幸夫編著『都市美 都市景観施策の源流とその展開』に「ベルギーの都市美運動」を執筆しました。

ブリュッセルの観光名所の一つに、セルクラースの像があります。1356年にブリュッセルはフランドル軍によって占領されてしまいましたが、セルクラースが「星の館」に掲げられた敵軍の旗をもぎ取り、それを発端に市民が蜂起し、敵軍を撃退しました。それ以来、英雄として讃えられているセルクラースの像を「星の館」のアーケードの下に作ることを1898年6月6日の市議会で提案したのは、シャルル・ビュルスでした(ビュルスについては、西村先生編著『都市美』の拙稿をご参照ください)。「グラン・プラスの家並みに調和するスタイルのモニュメント」という条件もつけています。1902年に完成したセルクラースの像の横には、ビュルスの市長としての業績を讃えたレリーフが設置されています(さりげなくアール・ヌーボー建築家オルタの作品)。



星の館(右端の小さな建物)



右手を触ると幸せになれるという伝説つきのセルクラースの像。観光客の人気者



ビュルスの業績を讃えたモニュメント(建築家 Horta と彫刻家 Rousseau による)

4年生インタビュー <第2回> 増田くん

栃木県は足利市出身です。親戚に大学進学者が少なくなくて、ボクが一族の「期待の星」になっちゃってます。帰省するとプレッシャーを感じますね。理科一類に入学したころは天文学に憧れていましたが、無味乾燥な数学の講義が嫌になって。もっと、なんか毛

色が変わった、「人間」に近いことやりたいなと。建築か都市工か、迷いましたが、今は都市工にしています。よかったなと思ってます。建物単体でない大きな視点の方が、自分には合ってるので。将来的には、とりあえず大学院進学を。まだ受験勉強ゼロですが。

本
だ
な

小泉 秀樹、矢作 弘編『シリーズ都市再生 (2)持続可能性を求めて 海外都市に学ぶ』(日本経済評論社、05年6月)に、阿部大輔(博士課程)の「パルセロナモデルについての論文、池田祥(0B、昨年度修了)の「イギリスCDCについての論文が収録されています。」

本誌配布コンセプト「徹夜のプロジェクトで疲れ眼の朝。活気ある院生室で弁当つつく楽しい昼。研究室会議で糞味噌に言われて泣きたい夜。いつでも、ふと手に取りたくくなるような、そんなマガジンめざして、記事を書いています」というのが、編集部坂内良明(研究室新聞係り)の抱負です。

編集後記 景観法完全施行の年、国立マンション住民敗訴とに次いで、松坂屋高層化を含む銀座中心部大再開発計画が表面化した。それだけに景観法実現のバネになった研究室のさらなる行動が切望されるとき、北沢転出は痛い、寂しい。一見いかつい体躯ながら、にっこり丁寧な人柄。アーバンデザインは身だしなみから?を地でいくオシャレ学者でもある。本号は新ポストへの抱負インタビューを報じたが、都市工の思い出インタビューもお願いしたい。(酒井)